

タイトル：2019 Middle Eastern and Islamic Studies in Japan: The State of the Art (No.13)

日時：2019年11月29日（金）10：00～13：20

場所：Crowne Plaza Beirut, Hamra Main Street, Beirut

“Mahdī ‘Āmil and the leftists’ debates on the Transitional Program of the Lebanese National Movement”

早川 英明（東京大学大学院総合文化研究科 博士課程）

本報告会では、レバノン共産党の代表的思想家であるマフディー・アーミルによる、宗派主義をめぐる思想とその政治的意味について報告した。マフディー・アーミル（1936–1987）は主に1970～80年代に活躍したマルクス主義思想家で、レバノンにおける宗派主義問題についても多数の論考がある。アーミルは宗派主義を「ブルジョワジーがその中で支配を維持する政治体制」、宗派を「従属階級とブルジョワジーが宗派として結びつく政治的関係」とあると定義した。彼によれば、レバノンの宗派主義国家においては、従属階級はその政治的代表的各宗派のブルジョワジーに見出すので、ブルジョワジーに対抗する独立した政治勢力を形成できず、ブルジョワジーの支配が継続してしまうのだ。

アーミルが所属した共産党は、所属していた左派系政治組織の連合「レバノン民族運動（LNM）」とともにレバノン内戦（1975–1990）に参戦した。LNMは内戦勃発から4ヶ月後の1975年8月、その政治改革案を「暫定プログラム」の名の下に発表し、その中で「政治的宗派主義」の廃絶を訴えた。その一方で、敵対するキリスト教徒を中心とする勢力と対抗する中で、イスラム教徒を中心とする諸勢力とも同盟した。こうした同盟の方針は、一部の左派系思想家から「宗派主義的」とであると批判され、「政治的宗派主義廃絶」のスローガンも、本来社会的問題でもある「宗派主義」を政治問題に限定している、と批判された。こうした批判に対して、アーミルは「宗派主義」とはそもそも定義からして政治体制の問題であるとし、「政治的宗派主義」のスローガンを擁護した。本報告ではこれを踏まえ、アーミルの宗派主義に関する理論は、同時代の一部の知識人から「宗派主義的」とも批判された政治路線を擁護するという政治的効果があったということを明らかにした。

上記の報告に対し、コメンテーターのナーディア・ブー・アリー先生から、次の2つのコメントを頂いた。一つは、本報告が明らかにするように、確かに内戦初期という特定の局面ではアーミルが党の「宗派的」方針を擁護しているということが出来るかもしれないが、アーミルが暗殺された87年直前の時期に書かれたものなども参照するとアーミルの違った側面が見えるかもしれない、というものだった。もう一つは、アーミルが「宗派的」党の方針を擁護するに至った理論的背景について、アーミルが強く影響を受けたアルチュセールとの比較を通して検討すると興味深いのではないかと、いうものだった。また、出席者のマスウッド・ダーヘル先生からも、アーミルの他の著作も広く検討する必要があるとの指摘を頂いた。

今回、自分の研究対象の地域であるレバノンで発表の機会を頂き、アーミルの著作をよく知る先生方からコメントを頂いたことは極めて貴重な経験であり、自分の研究にとっても大変有益であった。コメンテーターの先生方に感謝申し上げたい。また、当日出席して下さった関係者の皆様、一緒に発表した他の報告者の皆様にも感謝申し上げる。そして、渡航前、および現地で大変お世話になった東京外国語大学の黒木先生、熊倉先生、千葉さん、篠田さんにも感謝申し上げたい。